

赤松氏本家（惣領家）の流れ

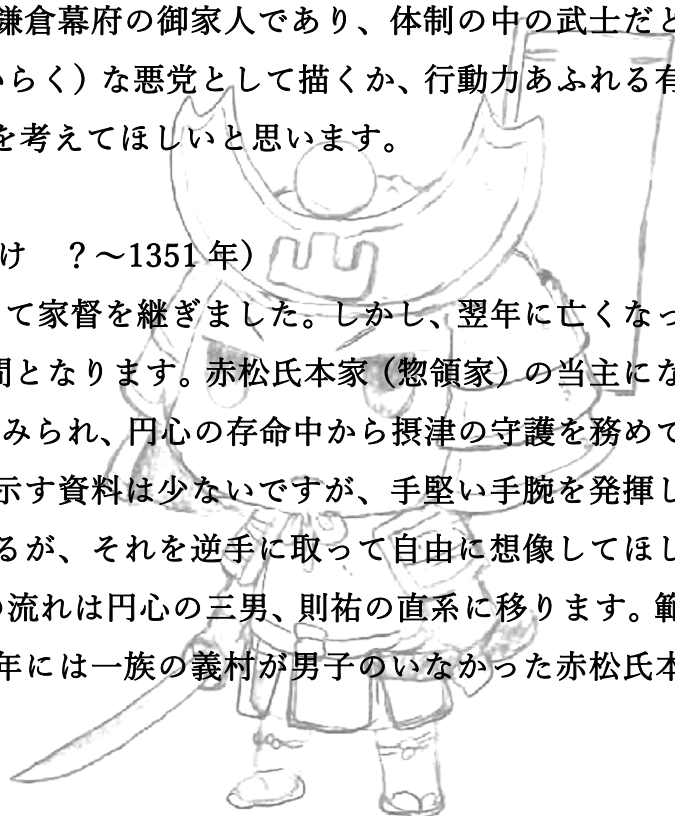
南北朝時代から戦国時代まで、途中多少の断絶はあるものの、約 250 年にわたって播磨などの守護を務めた赤松氏本家（惣領家）。その歴代当主は、実に個性豊かな面々がそろっています。いったいどんなキャラクターなのか、どんな生涯を送ったのか、1人1人にスポットライトを当てていきたいと思います。皆さんもこの紹介をもとに、自由に想像の翼をはばたかせ、オリジナルのキャラクターを描いていただければと思います。

悪党か武家か 赤松円心（えんしん 1277～1350年）

中世の日本を変えた人物といってもよいでしょう。後醍醐（ごだいご）天皇の皇子、護良（もりよし）親王の求めに応じていち早く鎌倉幕府打倒の兵を挙げ、後醍醐天皇による政権の誕生を後押ししました。しかし、恩賞の不公平などを理由に反旗をひるがえし、今度は天皇側と戦って足利尊氏（あしかが・たかうじ）による室町幕府発足の立役者となりました。特に有名なのが、円心が築いた白旗城（兵庫県上郡町）での戦いです。尊氏軍が形勢不利になったとき、円心は室津（兵庫県たつの市）で開かれた軍議で、尊氏にいったん九州に逃れて勢力を回復するよう進言したとされます。その間、円心は播磨にとどまって敵の進攻を食い止める作戦でした。円心は6万ともいわれる新田義貞軍の猛攻に50日以上耐え、勢いを取り戻した尊氏とともに勝利を収めました。作戦面も戦闘力も優れた円心は、いったいどんな人物だったのでしょうか。これまでは「悪党」のイメージで語られることが多く、荘園の支配に抵抗し、時には乱暴も働くアウトローな円心像でした。白旗城でのゲリラ戦を勝ち抜いたタフさから来ているのでしょうか。一方、近年は鎌倉幕府の御家人であり、体制の中の武士だという説も有力になっています。豪放磊落（らいらく）な悪党として描くか、行動力あふれる有能な武士として描くか、ぜひあなたの円心像を考えてほしいと思います。

短かった活世 赤松範資（のりすけ ?～1351年）

円心が没した後、嫡男（ちやくなん）として家督を継ぎました。しかし、翌年に亡くなったため、播磨守護を務めたのは極めて短い期間となります。赤松氏本家（惣領家）の当主になった段階で、年齢はすでに60歳前後だったとみられ、円心の存命中から摂津の守護を務めていたことも分かっています。播磨での活動を示す資料は少ないですが、手堅い手腕を発揮したのでしょうか。その人物像も謎に包まれているが、それを逆手に取って自由に想像してほしいと思います。範資の死により、赤松氏本家の流れは円心の三男、則祐の直系に移ります。範資直系の血脈は「赤松七条家」と呼ばれ、後年には一族の義村が男子のいなかった赤松氏本家に婿養子として入っています。

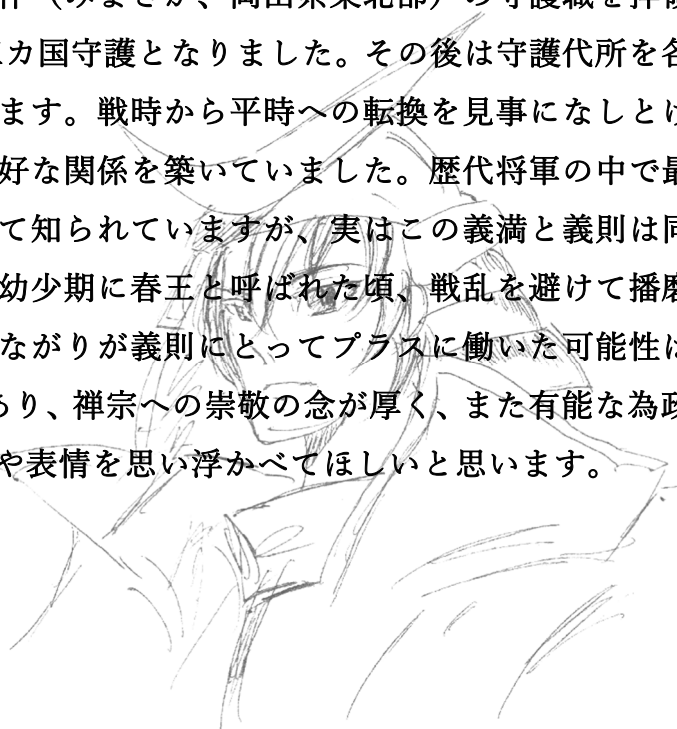


失敗しない男 赤松則祐 (そくゆう 1311~71年)

赤松家きっての知将。一言でいうと「失敗しない男」でした。円心の三男として生まれ、もともとは赤松氏本家(惣領家)を継ぐはずのない立場でした。それゆえ幼少期に出家し、比叡山などで修行しています。ところが、円心の跡を継いだ2代目当主、範資(のりすけ)が早くに亡くなったため、本家を継ぐチャンスがめぐってきました。則祐を語る上で、最も印象的な事件が「南朝転属」。当時、天皇家は南朝(大覚寺統)と北朝(持明院統)に分裂して対立していました。赤松氏は北朝に味方していました。ところが、則祐は突然、南朝方の皇子を「赤松宮」として播磨に迎え、北朝方に戦いを挑みます。これが南朝転属といえます。大きなかけに見えますが、結果的に赤松家の中で則祐の存在感を高め、幕府に対しても南朝との交渉のキーマンと認識させたといえます。則祐は次の年にはまた北朝方に戻るが、播磨守護の地位は最初は南朝側から与えられ、そのまま定着させた可能性があります。これらの行動が計算づくだったとすると、何という知略でしょうか。また、則祐は本家の当主になった後も、還俗(げんぞく)せずに僧侶のままでいました。寺院を通じたネットワークは、さまざまな場面で生かされ、南北朝の対立や、足利将軍家の内紛「感応の擾乱(じょうらん)」など、複雑で困難な時代を鮮やかに乗り切りました。僧形のクールガイであります。城山城(きのやまじょう、たつの市)を築いたのも則祐の功績です。

絶頂期の教養人 赤松義則 (よしのり 1358~1427年)

赤松家の中で最も平穏な生涯を送った人物でしょうか。戦乱の世を駆け抜けた円心や則祐と比べると、その印象はますます濃くなります。もっとも、当主時代の前半は但馬の山名氏が幕府に反旗をひるがえした「明德の乱」に出陣し、勝利したが有力な将兵を失うなど大きな打撃を受けます。しかし、それによって美作(みまさか、岡山県東北部)の守護職を拝領し、播磨、備前(岡山県東南部)と合わせ、三カ国守護となりました。その後は守護代所を各地に置くなど、支配体制を次々と整えていきます。戦時から平時への転換を見事になしとげたといえます。義則は、将軍足利義満とも良好な関係を築いていました。歴代将軍の中で最も権勢をふるい、金閣寺を建立した人物として知られていますが、実はこの義満と義則は同年の幼なじみだったと考えられます。義満が幼少期に春王と呼ばれた頃、戦乱を避けて播磨に逃れたことがありました。この時以来のつながりが義則にとってプラスに働いた可能性は高いと思われます。義則は、優れた歌人でもあり、禅宗への崇敬の念が厚く、また有能な為政者であり、文化人でもあった義則。その人柄や表情を思い浮かべてほしいと思います。

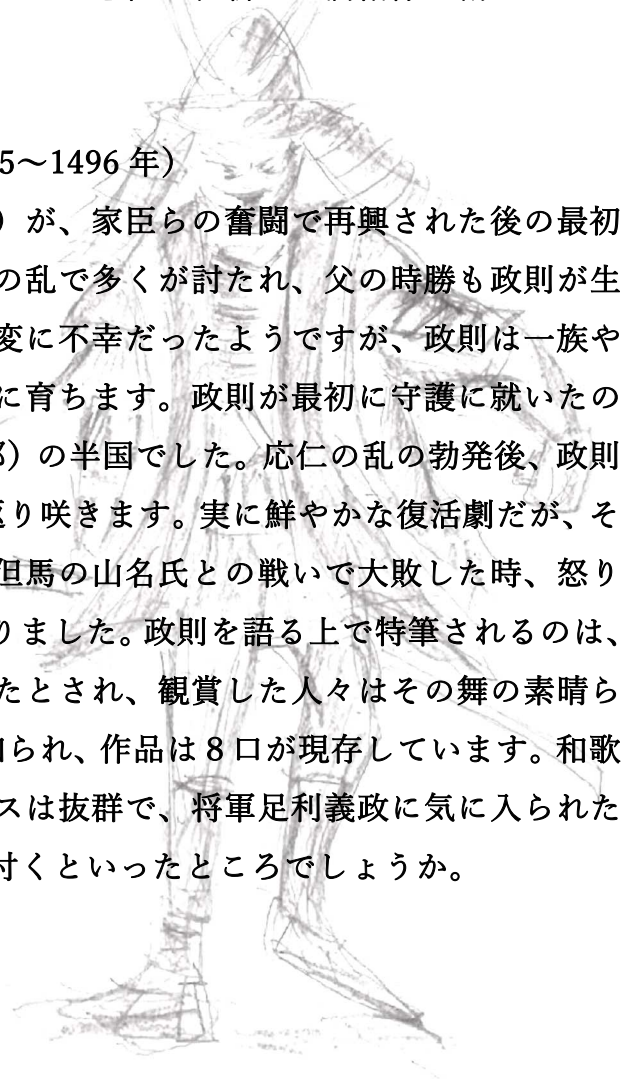


悪評の裏には 赤松満祐 (みつすけ 1373~1441年)

歴代の赤松家当主の中で、一番の悪役キャラといえるでしょう。何ととっても、嘉吉(かきつ)の乱で、将軍足利義教(よしのり)を重臣の目の前で暗殺した事件が強烈です。円心から3代にわたって築き上げた赤松氏の地位を、ぶっこわした人物ということになるのでしょうか。生前は「身長最短、世の人三尺入道と号す」、つまり身長1m足らずの坊さんと呼ばれたと伝わりますが、ずいぶんな言われようであります。短気ですぐプツツンする人物。普通に考えればそういう評価になりますが、別の見方もできます。実は満祐は、2人の将軍と深刻な対立状態に陥りました。最初は将軍義持。赤松氏の強大化を警戒する義持は、播磨国を取り上げようとしています。赤松氏発祥の地を手放しては、武士の面目がすたる、そこで満祐は、京都の自邸に火を放ち、播磨の白旗城に帰って籠城戦の準備をします。結局、義持とはその後和解しました。次の義教は暗殺という結果に終わります。その背景には、直前に古参の重臣たちが次々と暗殺され、次は満祐と噂されたことがあります。やられる前にやる。「自力救済」は中世の武士の行動原理です。一方、満祐は暗殺を決行する前、将軍や南朝の血を引く人物を擁立しようとしていました。周到な計画に基づいたクーデターだったともいえますが、結局、城山城で一族とともに自刃に追い込まれます。満祐は、和歌を詠んだり、茶の湯をたしなんだり、教養人としての一面も持っていました。あなたの感性で、新しい満祐像を創ってください。

抜群のセンス 赤松政則 (まさのり 1455~1496年)

嘉吉の乱でいったん滅亡した赤松本家(惣領家)が、家臣らの奮闘で再興された後の最初の当主であります。祖父満祐ら一族の男子は嘉吉の乱で多くが討たれ、父の時勝も政則が生まれてすぐに亡くなってしまいます。幼少期は大変に不幸だったようですが、政則は一族や家臣の期待を背に「威儀肅然」とした立派な青年に育ちます。政則が最初に守護に就いたのは、赤松家にとって無縁の地、加賀国(石川県南部)の半国でした。応仁の乱の勃発後、政則は混乱に乗じて播磨、備前、美作の三カ国守護に返り咲きます。実に鮮やかな復活劇だが、その後の政権運営は不安定さがつきまといました。但馬の山名氏との戦いで大敗した時、怒り心頭に発した家臣団から追放されかけたこともありました。政則を語る上で特筆されるのは、芸能に秀でていたことです。特に猿楽の名手だったとされ、観賞した人々はその舞の素晴らしさに感嘆したといえます。また、刀剣の腕でも知られ、作品は8口が現存しています。和歌や連歌にも親しんだとみられます。芸術的なセンスは抜群で、将軍足利義政に気に入られたといいますが、武将としての実力は少々疑問符が付くといったところでしょうか。



女大名の先駆者 洞松院 (とうしょういん ?~?年)

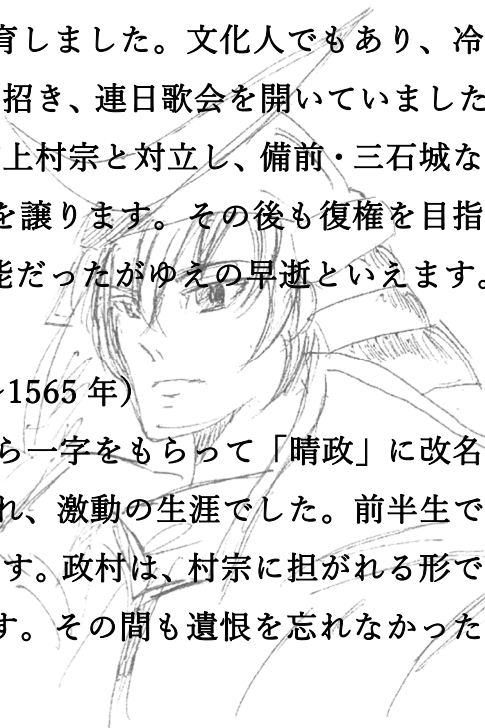
女性なので、赤松家の当主ではありません。しかし、夫政則が急死した後、婿(むこ)養子に迎えた義村が若年だったため、守護の代役を務めました。女戦国大名のさきがけともいえる存在。もともとは名門細川家の生まれで、結婚せずに尼になっていたところを呼び戻され、義村の後妻となりました。赤松家と細川家の結び付きを強めるための政略結婚だったようです。結婚の前、実家に「鬼瓦」と落書きされたと伝わっています。かなり個性的な人物だったのでしょう。守護の代わりに務める際、内政面はあくまで亡父の意を代弁する形を取りましたが、外交面では抜群の手腕を発揮しました。義村と管領家の細川高国が対立した際は、おばとおいとの関係を生かして調停役を務め、見事に和睦を取り付けました。居館のある置塩(姫路市夢前町)が、冷泉家当主や連歌師らが訪れる文化拠点になったのも、彼女の人脈がものを言ったとみられます。義村が自立した後に関係が悪化したとみられ、むこが重臣浦上村宗に謀殺された際は、娘瑞松院(ずいしょういん)と共に村宗に味方し、義村を見捨てました。乱世をしたたかに生きた強い個性をぜひ表現してほしいと思います。

悲運の婿養子 赤松義村 (よしむら ?~1521年)

歴代当主の中で、最も悲劇的な人物かもしれません。赤松家再興後の初代当主、政則が急死した後、赤松七条家から婿養子に迎えられました。七条家は円心の嫡男、範資(のりすけ)からの流れで、本来なら本家(惣領家)になるべき名門です。義村は、本家再興の希望に燃えて養子入りしたのではないのでしょうか。跡を継いだ後、まだ若年ということで義母の洞松院が執政を取りました。その後、家臣らの要望もあって自ら政務を取るようになってからも、洞松院の存在には悩まされたようです。義村が実権を握ったのはわずか3年ほどと短かかったですが、強いリーダーシップを発揮しようとしたとみられます。五カ条からなる式目(法令)を定め、公平な裁判を目指すとともに、女性の口出しを禁じています。また、将軍家との関係も深め、後に将軍義晴となる亀王丸を手元で養育しました。文化人でもあり、冷泉家の当主や連歌師を頻りに置塩(姫路市夢前町)の居館に招き、連日歌会を開いていました。しかし、性急に政治改革を進めようとしたためか、重臣浦上村宗と対立し、備前・三石城など浦上方の拠点を攻めるが敗退。出家して子の政村に家督を譲ります。その後も復権を目指しましたが、最後は室津(たつの市)で殺害されます。有能だったがゆえの早逝といえます。

激動期に奮闘 赤松政村 (まさむら ?~1565年)

1539年までは政村を名乗り、その後は将軍義晴から一字をもらって「晴政」に改名しました。40年近い長い治世だが、その間は戦乱に明け暮れ、激動の生涯でした。前半生で特筆されるのは、父義村のかたき、浦上村宗を討ったことです。政村は、村宗に担がれる形で当主に就いたため、長らくその影響下にあったとみられます。その間も遺恨を忘れなかったの



ようか。当時、村宗は有力守護細川高国と結託し、高国のライバルの細川晴元らと中央の覇権を争っていました。政村による村宗暗殺で形勢は大きく傾き、高国は尼崎で自刃に追い込まれます。親のかたき討ちが中央の政治状況も大きく動かしたのです。その後、播磨を取り巻く状況は複雑化します。西国の戦乱が波及し、尼子氏が播磨に攻め込んでくると、政村は置塩（姫路市夢前町）の城や居館を放棄し、淡路へ退避します。この動きを「敵前逃亡」とする見方もありますが、政村は各地で粘り強く戦いを続け、2年後に置塩へ帰還を果たします。それ以降は、つかの間の平穏が訪れたようですが、それも長くは続きません。政村の治世の終わりは、子息義祐のクーデターによるとされます。父のかたき討ちで実権を握った政村が、子のクーデターで失脚するのは歴史の皮肉としかいいようがありません。赤松氏衰退期の当主ですが、生涯にわたってお家のために頑張り抜いた苦労人ともいえます。

奇抜な個性派 赤松義祐（よしすけ ?～1576年）

史料が乏しく、確実に言えることは少ないですが、かなりアクの強い人物だったと想定されます。当主に就いたのは、クーデターで父政村（晴政）を追い出したのがきっかけ。最後は子則房と対立し、当主の座を追われたとされます。親とも子とも関係はぎくしゃくしていたようです。さらに、義祐の個性を物語るのが、奇抜ともいえる花押（かおう）。花押は公式な文書などに入れるサインで、書き手の人格を表すとされます。義祐は花押をころころ変え、しかも字体が独特で、奇抜ともいえます。実像がよく分からない当主なので、自由にデザインしてほしいと思います。パンクでファンキーな姿にするのも一案かもしれません。

最後の本家当主 赤松則房（のりふさ ?～?年）

赤松氏本家（惣領家）の最後の当主です。父義祐と不和だったらしく、三木へ追い払う形で当主に就いたとされます。その頃には、赤松氏の支配権が及ぶのは播磨北部に限定され、もはや守護ともいえない状況でした。しかも、則房の治世は織田信長の台頭に重なります。則房は織田方の羽柴秀吉につき、赤松家の存続に懸けたとみられます。しかし、秀吉の播磨平定後は居城の置塩城の破壊を命じられ、わずか1万国で阿波（今の徳島県）へ移封させられました。その後の足取りは不明で、終焉の場所や没年すらわかりません。阿波に置塩の地名が残っているのが数少ない名残といえます。祖父政村の時代に本格的に始まった置塩城の整備は、実は則房の時代に一番大掛かりな施設が造られたことが近年の発掘調査で分かりました。高さ10mを超える切岸（人工的な崖）や、麓を見下ろすような本丸跡がそれです。播磨の武家社会に長年根付いてきた赤松氏の権威を、家臣と共に形にしようとしたのかもしれない。

